

# 什器破壞業事件

海野十三

青空文庫



おんなたんでい  
女探偵の悒鬱

「離魂りこんの妻つま」事件で、検事六条子爵がさしのぼしたあやしき情念燃ゆる手を、ともかくもきつぱりとふりきつて帰京した風間光枝かざまみつえだつたけれど、さて元の孤独に立ちかえつてみると、なんとはななく急に自分の身体が汗くさく感ぜられて、侘わびしかつた。

「つよく生きることは、なんとという苦しいことであろうか？」

彼女は、日頃のつよさに似ず、どういふものかあれ以来急に気が弱くなつてしまった。たつたあれくらいのことことで、急に気が弱

くなつてしまふというのも、所詮しよせんそれは女に生れついたゆえであらうが、さりとは口惜くちおしいことであると、深夜ひそかに鏡の前で、つやつやした吾れと吾が腕をぎゅつとつねってみる光枝だつた。

彼女の急性きゆうせい悒鬱いゆううつ症しょうについては、彼女の属する星野私立探偵所内でも、敏感びんかんな一同の話題にのぼらないわけはなかつた。

だが、余計な口を光枝に対してきこうものなら、たいへんなことになることが予て分かねつていたから、誰も彼も、一応知らぬ半兵衛はんべえを極きめこんでいたことである。

ところが、或る日——星野老所長は、風間光枝を自室へ呼んで、「君はなにかい、帆村莊六ほむらそうろくという青年探偵のことを聞いたこと

がないかね」

と、だしぬけの質問だった。

帆村莊六——といえば、理学士という妙な畑から出て来た人物だ。それくらいのことなら光枝も知っているが、他はあまり深く知らない。そのことをいうと、老所長は、

「あの帆村莊六という奴は、わしと 同郷どうきようでな、ちよつと或る

縁故えんこでつながっている者だが、すこし変り者だ。その帆村から、

若い女探偵の助じよりよく力を得たいことがあるから、誰か融通ゆうずうして

くれといってきたんだ。どうだ、君ひとつ、行ってくれんか」

「はあ。どんな事件でございましょうか」

「いや、どんな事件か、わしはなんにも知らん。ただはつきり言

えるのは、彼奴あいつはなかなかのしつかり者で、婦人に対してもすこぶる潔癖けつぺきだから、その点は心配しないように」

老所長の言葉は、なんだか六条子爵のことを言外げんがいに含めていつているようにも響ひびいた。

とにかく風間光技は、日毎夜毎の悒鬱ひごとよごとを払うには丁度ちようどいい機会だと思つたので、早速さつそく老所長の命令しんがに従つて、自分の力を借りたという帆村莊六の事務所へでかけたのだった。

帆村の探偵事務所は、丸の内まるのうちにあつたが、今時流行いまどきはやらぬ煉瓦だて建いんきの陰気いんきくさい建物の中にあつた。びしよびしよに濡ぬれたよ

うな階段を二階にのぼると、そこに彼の事務所の名札なふだが下げてあつた。彼女は、入口に立つていちよつと逡巡しゆんじゆんしたが、意を決

して扉を叩いた。すると中から、

「どうぞ、おはいりください。扉じょうに錠じょうはかかっていますから、あけておはいりください」

と、若々しいはつきりした声が聞えた。風間光枝は、吾れにもなく、身体がひきしまるように感じて、扉を押した。すると、室内には、入ったすぐのところついたてに大きな衝立ついたてがあつて、向うさえぎを遮つていた。その衝立の向うから、ふたたび声がかかった。

「さあどうぞ。どうぞ、その椅子に掛けて、ちよつとお待ちください。ちよつといま手が放せないことをやっていますから、掛けてお待ちください」

「はあ、どうも。では失礼いたします」

風間光枝は、挨拶あいさつをかえして、入口を入った左の隅すみのところにある応接椅子に腰を下ろした。その傍わきに、別な部屋へいくらしい扉があつて、閉つていた。その扉のうえには、どこかの汽船会社のカレンダーが「九月」の面めんをこつちに見せて、下つていた。

光枝の腰を掛けているところからは、やはり衝立の奥が見えなかつた。彼女はしばらくじつとしていた。衝立の向うで声をかけたのは帆村であろうが、彼は一体なにをしているのか、ことりとも物音をたてない。

彼女は、すこし待ちくたびれて、眠気ねむけを催もよおした。欠伸あくびが出て来たので、あわてて手を口に持つていったとき、突然思いがけなくも、彼女が腰をかけているすぐ傍わきの扉が、カレンダーごと、ごと

んと奥へ開いた。そして一人の長身の紳士が、ぬつと立ち現れた。その手には写真の印画紙いんがしらしいものを二三枚もっているが、いま水から上げたばかりと見えて水滴すいてきがぼたぼた床のうえに落ちた。(奥から出てきたこの人は、一体誰だろう?)と、風間光枝は心の中に訝いぶかった。

「やあ、どうも。たいへん早く来てくださつてありがとうございます。星野先生は、ちかごろずっと元気ですか」

「はあ。さようでございます」

「それは結構です」といって、その長身の紳士は光枝の前の椅子に腰を下ろして、じろじろこつちを見た。まだ光枝が名乗りもしないのに、紳士の方では、彼女のことを先せんこく刻知っていると

たような態度を示しているのだ。どことなく薄気味うすきみわるさが、彼女の背筋せすじに匂はいがつてくる。

「失礼でございますが、貴方さまが帆村——帆村先生でいらつしやいますか」

「ははあ、僕が帆村です」と無造作むぞうさに答えて、「風間さんの背丈は、皮草履かわぞうりをはいたままで一メートル五七、すると正味しょうみは一メートル五四というところで、理想型だ」

「えつ、いつそんなことをお測りはかになりましたの」と、光枝は思わず愕おどろきの声をあげた。

## 科学探偵の腕

帆村探偵は、一向平気な顔で、

「これは内緒ないしよですが、貴女も探偵だからいいですが、僕のところでは、訪問者が入口のところ<sup>に</sup>立ったとき、自動的に身長を測ることにしています。もちろん光電管フォト・セルをつかえば、わけのないことです。あの入口の上をごらんないさい。一・五七と、まるでレジスターのような数字が幻灯仕掛げんとうじかけで出ているでしょうが」

「えっ、まあそんなことが……」光枝がふりかえると、なるほど入口の上の壁紙かべがみに、一・五七という数字がでてい

「こうすれば、消えます」なにをしたのか、帆村がそういうと、数字はぱつと消えた。まるで魔術を見ているような塩梅あんばいだった。なるほど帆村探偵という人は変っていると、光枝は感心した。

「貴女は内輪うちわの人だから、もう一つこれも御なぐさみにごらんに入れるかな。さあ、この写真はどうぞです」そういつて帆村は、手にしていた水のまだ切れぬ三枚の細長い写真の表をかえして、光枝の方に押しやった。

「あら、まあ！」光枝は、自分でも後あとで恥はずかしいと思ったほど、頓とんきよう狂きやうな声を出した。なぜといつて、帆村がさしだした三枚の

細長い写真には、表情たつぷりな光枝の半身像はんしんぞうが五六十個も連続的にうつつているのであった。それは正面と横とが同時にとれ

ていた。よく見るとなんのこと、それは今しがたこの部屋に入つて、この椅子に腰を下ろすときから始まつて、終りのところは、すこし睡ねむくなつて口をあいて欠伸あくびをするところまで、いやにはつきりととれていたのであつた。

「あら、まあ。あたくし、どうしましょう」風間光枝は、もう一度愕おどろきの声を発した。

「きよう試験的に、この写真機を取付けてみたんです。ちよつと貴女あなたを材料に使つてみましたが、なかなかうまく撮とれる。一分間に六十枚まで撮れます。一つのレンズは、正面にあつて、あの厚い辞書の中にあります。黒い紗しゃのきれが前に貼つてあるから、こつちから見ても分りません。もう一つのレンズは、そのカレンダー

ーの下の方に黒い波がありますが、そこに窓があいていて、扉の向うから撮るようになってる。いや案外簡単なものですよ」

そういつただけで、帆村は光枝の表情の変化などについても一言も批評らしい口をきかなかつた。それだけ光枝の方では、間が悪かつた。

「先生は、お人がわるいんですのね」

「いや、どういたしまして。これが商売ですからね、そうじゃありませんか」帆村は、そういつた後で、光枝の姿をじつと眺めていたが、やがて、

「ときに貴女は、なかなかいい身体をしていますね。うまそうな女というのは貴女のことだ。ちよつとこつちへいらつしやい。誰

も居ないから、大丈夫です」帆村はそういつて、腰をうかすと、いきなり風間光枝の手首を握つて、ひきよせた。

「まあ、先生」光枝は、愕きのあまり呼吸が停りそうになつた。

ここへ来る前、星野社長はわざわざ、帆村の潔癖を保証したが、

その話とはちがつて、彼はとんでもない痴漢であつた。六条子爵

の場合よりも、もつともつと露骨で下卑ている。光枝は、帆村と

抗争しながら、そのとき脳裏に電光の如く閃いたものがあつた。

それは、傍の衝突の向うに、なにか手の放せない仕事をしてい

るといつた男のことを思い出したのだ。あの男は、彼女がこの部

屋に入ったときからあそこにいて、静かに仕事をつづけているら

しい。なぜなら、彼はどこへ立つた気配もないから、やはりあそ

ここにいるにちがいないのだ。

「あつ、先生。およし遊ばせ。あの衝立の向うに仕事をしていらつしやる所員の方に対しても、はず恥かしいとお思ひにならないんですの」といって、帆村に握られた腕を無理やりに払った。

「えつ、所員ですつて。そんな者はいませんよ。きようは僕一人なんです」

「でも、さつきあの衝立ついたての向うから……」

「あつはつはつ、あの声ですか。あれは所員がいて、声を出したわけではなく、録音ろくおんの発声器はっせいきなんです。自動式に、訪問客に対して挨拶をする器械なんですよ。嘘だと思つたら、こつちへ来て衝立の蔭をごらんなさい」

「そんなこと、嘘ですわ」と光枝はいつたが、衝立の後を見ないではいられなかった。帆村が後にさつたのを幸さいわいに、素早すばやくそこを覗のぞいてみて、あつと愕おどろいた。なるほど、衝立の後には、誰もいない。小さな卓テーブル子のうえに、なるほど録音の発声器らしいものが載っているだけだ。その附近には、人間の出ていく扉もなければ、人間の身体が隠れる物蔭もない。するとやっぱり帆村のいったとおりなのである。

また新たなその大きな愕おどろきと、そしていよいよこの部屋の中に、自分は帆村と二人きりなんだと思うと、俄突然にぞくぞくとしてくる或る危険に対する戦慄せんりつ！ 光枝は、とんでもないところへ来たものだ、胸がどきどきだ。はじめから安心しきって来ただけに、

彼女はこの不意打ふいうちに狼狽ろうばいするしかなかった。あの入口には、きつともう、扉をしめるとがちやんと閉る自動錠がかかっているの  
 であろう。壁はこのとおり厚いし、第一窓というものがない。い  
 くら喚わめいたって、もうどうにもなるまい。こうなるのも運命だ。  
 彼女は、すっかり観念して、目を閉じた。

奇妙な任務

そのとき帆村の声が光枝の耳に入った。

「いや、どうも失礼しました。これからお願いする仕事に関して、  
あらかじ予め貴女のしよじよせい処女性はんぱつりよく反撥力といったようなものをため験しておき  
 たかったのです」帆村は、急に意外なことをいいだした。

「えっ、まあそんな……」

「でも、こいつばかりは話だけでも信用がなりません。やっぱり  
 実験してみなくちゃね。さあ、そこへもう一度掛けてください」

光枝は、腹が立つというのか、それとも俄にわかに安心をしたという  
 のか、妙な気持で、再び椅子に腰を下ろした。この年齢になるま  
 で——といって彼女はお婆さんだという意味ではない、これはそ  
 つと読者に知らすわけだが、風間光枝の本当の年齢は、とうねん当年と  
 つてやつとまだ二十歳なのである。——とにかく、こんなに愕き

の連発をやったことがなかった。彼女は、改めて帆村の顔をぐつと睨みかえした。このまま部屋を出て行ってやろうかと思つたほどだが、女探偵ともあろうものがと、どうにかこうにか自分の激げきしよう情をおし鎮め、帆村の次なる言葉を待った。

「うむ、僕は満足です。貴女なら、きつとうまくやるだろう」と、帆村はもとの冷い顔になつて、しきりにひとりうなずで肯いて、

「——さて、貴女に頼みたい仕事のことなんですがね。或るお屋敷で、主人公が小間使こまづかいをさがしているのです。尤ももつと、前にいた小間使の娘さんは、僕が買収して、親の病氣だと申立てて辞めやさせたんです。そこで後任こうにんの小間使が要るわけだが、ぜひ貴女にいつて貰いたいです」いよいよ帆村は、こうまで彼女に手間ど

れた重大事件について語りだした。

「ねえ、ようがすか。そのお屋敷は、最近建てたばかりの洋館です。貴女は今もいったとおりの小間使だが、こんど主人公の希望に従って、貴女は洋装をしてもらわねばならない。明めいろう朗な娘になるのです。いま国こくさく策で問題になっているが、これも仕事のうえのことだから、ひとつ思い切って猛烈なパーマネントに髪を縮ちぢらせてください」

光枝は、最初はなにいつてるかと思つて聞いていたが、聞いているほどに、だんだん興味を覚おぼえてきた。これはなかなか念のついた冒険劇のようである。

「そこで、向うへいつて貴女のする仕事だが、もちろん小間使な

んだから、インテリくさい顔をしてはいけない。ほら、いまどき銀座通を歩けば、すぐぶつかるような時局柄じきよくがらをわきまえない安い西洋菓子のような若い女！ あの人たちの表情を見習うんですな。いや、これは女性の前で、ちと失言しつげんをしたようだ」

光枝は、またむらむらとしてきたものだから、何もいわずにいた。

「いいですか。向うへいったら、気をつけて、物を壊こわすんです。さかんに壊すんです」

「あらまあ、どうしてでしょう」向うへいったら、さかんに物を壊せ、気をつけて物を壊せといわれて、光枝はひどく愕おどろいた。どうも帆村のなすこと云うことは突飛とつびすぎて、常識ではついていけ

ない気がする。

「コーヒー茶碗ちやわんとか、花瓶かびんとか、灰皿とか、スタンドとか、そういうったものを、あれつとか、あらつとかいいながら、じやんじやん下に墜おとして壊してください」

「そんなことをすれば、私はすぐ馘くびになってしまいますわ」

「なあに大丈夫。貴女なら馘くびの心配はないから、どしどし壊してください」

「弁償べんしょうしなくていいのですか」

「弁償なんか、心配無用です。ただ心懸けておいてもらいたいの  
は、行つてから二三日以内に、本棚のうえにおいてある青磁色せいじいろ  
の大花瓶おおかびんを必ず壊すこと、これはぜひやってください。そして

その翌朝、貴女は自分でハガキを入れにポストまで持って出るんです。いいですか」

「大花瓶を壊すことは分りましたが、翌朝ハガキを投函とうかんにいくといって、なんのハガキをもつて出るのですか」

「誰あてのでもいいですよ。——それから大事なことは、けつして女探偵だと悟さとられないように振舞ふるまってください。ものを壊すにしても、良心にとがめるといったような菩提ぼだいしん心を出さないで、こんな壊れ物を扱てわせるから壊れるんじゃないの……ぐらいの太ふ々てしさでやってください。なにしろすこしにぶい小間使らしく振舞ふるまってください」と、帆村は自分の脳のうてん天てんに指をたてた。

「まあ、たいへん骨が折れますのねえ」

「まあ、そういわないで、やっってください。主人公が何をいつても何をして、例のすこしにぶい小間使の要領でいくんですよ」

「そんなことをして、どうしようというんですの。一体どんな事件なんですか。あたしにすこしぐらいお明あかしになつたつていいでしょう」

「ううん、それがいけない」と帆村は大きく頭をふり、

「そのように貴女が探偵気どりでいちやいかんです。あとのこと  
は僕がうまくやるから、貴女はなにも愕かないで筋書どおりやつ  
てください。どこまでも、うぶな娘さんのつもりでいてください」

「そして低脳はつきぶりを発揮はつきしろとおっしゃるんでしょう」そういつ  
て風間光枝は、横眼をつかつて、さも憎にくらしげに帆村をじろりと

見た。

破壊作業はかいさぎよう

その日の夕方、風間光枝はすっかり仕度をととのえ、口入屋くちいれやの番頭に化けた帆村に伴われて、問題のお屋敷の裏門をくぐった。裏門から裏玄関へ。裏玄関といつても、なかなか堂々たるもので、家賃百円を出してもこれくらいの玄関はついていまいと思われたいる大した構えだかま。

「ああ大木屋か。たいへん遅いもんだから、もう他へ頼んじまつた。用はないから、帰れ、帰れ」この家の主人公にちがいない五十を二つ三つも越えた肥満漢ひまんかんが、白い麻のゆかたを着て、裏玄関までのこのこ出て来た。よほど暑がり屋と見える。

「へえ、どうも相済みませんでございました。じつはこちらさまにきつとお気に入ること大うけあいという上玉じょうだまがありましたもんで、それを迎えに行つておりましたような次第しだいで——ところがこれが埒玉さいたまの在ざいでございました、たいへん手間どれました。ここに控ひかえておりますのが、その一件でございました、在には珍らしい近代的感觉をもちました娘でげして……」

「こら、大木屋。こんどだけは特に大目に見てやるが、この次か

ら容赦ようしやせんぞ。この次は絶対出入差止めだ。特にこんどだけは——おい、なにをぐずぐずしとる。早くその——ええソノ阿魔あまつ児こを上へあげろちゆうに」

旦那様は、たいへんな騒ぎ方であつた。

帆村は、わざとなんにもこの旦那様について説明をしなかつたが、玄関の段でもつて、この旦那様のこれまでの半生はんせいがはつきり分つたような気がした。なにかぼろい大仕事をして成上つた人物で、教育なんぞはないくせに、尖端せんたん的文化てんてきの乱食者らんじきしやであることが、絵に描いてあるように、光枝にははつきり見えるのだつた。

そこで光枝は、早速さつそくその夜から、旦那様づきの小間使として、

まめまめしく仕つかえることとなった。

「ふふふん」ときおり光枝のうしろで、そういう咳せきばらいとも呻うなり声ともつかないものが聞えた。そのようなとき、光枝がふりかえつてみると、必ずそこに旦那様のきらきらした眼があつて、とたんに旦那様は犬にとびこまれた鶏とりのようにばたばたと狼ろう狽ばいなされるのであつた。

旦那様は、非常に無口の方であつた。但しこれはあたらしい小間使の光枝に対してだけの話で、その他のお手伝いさんや使用人は、方言まじりの言葉で、こつぴどく叱しかりつけられていた。

その夜のうちに、光枝は廊下のうえにコーヒー茶碗をおとして、がちやんと割つた。それが開かいぎ業ぎょう式しきだつた。早速その夜のうち

にこの仕事を始めておかなければ、その次の日になってやりだすには、ちとやりにくいだろうと思ひ、ともかくも一発だけはその夜のうちにやっておくことに決心したからであつた。

がちやんと、たいへんな音がして、コーヒー茶碗の皿がたくさんの小片こぎれに分れて、あたりに飛びちつた。茶碗の方は、小憎こにくらしくも、把手とつてが折れたばかりだつた。

「な、な、な、なにをしおつた？」と、居間から旦那様の叫きようか喚ん！ つづいて廊下をずしんずしんと旦那様の巨軀きよくがこつちへ転がってくる気配がした。反対の方からは、雇やといにん人の一隊が、それというので駆けつける。これは茶碗が破われた音に愕おどろいたといふよりも、旦那様の怒声どせいに対応して駆けつけたのであつた。

「うううう、なんだギンヤがやったのか」

ギンヤ——というのは、銀やと書くべきか銀弥ぎんやと書くべきか、

よくわからないが、ともかくもこれがこの邸やしきにおける風間光枝の源氏名げんじなであつた。——旦那様は、呶鳴どなりつけるつもりだつたらし

いが、新任の楚々そそたるモダン小間使のやつたことと分ると、くるしそうにえへんえへんと咳せきばらいをして、早々そうそう奥へひきあげて

いった。その代り、他の雇人隊が、口を揃えて光枝の不始末ふしまつを叱りつけ、ががあがあぶつぶつはいつ果つはとも見えなかつた。すると

また、奥の方からずしんずしんどんどんと、旦那様の豪快なる楚あ音しおとが近づき、

「こりや、いつまでも騒々しいじやないか。壊れたものはしよう

がない。早く片づけて、しずかにしろ。このバルシャガルどもめめ！」なにがバルシャガルどもめか、なにしろこの旦那様のいう言葉の中には、時として訳の分らない言葉がとびだす。

とにかく、ギンヤこと風間光枝のじゆうきはかいぎよう什器破壊業の店開きは、こうして行われた。

そのとき光枝が感じたことは、物を壊すことは、案外気持のいいことである。もちろん物資愛護ぶつしあいごの叫ばれる現下げんかの国策こくさくに背馳はいちする行為ではあったが、しかし光枝の場合は、壊すための理由があった。つまりそれは、帆村探偵から頼まれて、なにかの事件解決のためやっていることゆえ、国策に背馳するものだとはいえない安心があった。すなわち、がちやーんの音を聞く瞬間、光枝の胸

の中に鬱積うっせきした不満感といったようなものが、一時的ではあつたが、たちまち雲散霧消うんさんむしょうしてしまふのを感じたことであつた。だが、なにゆえに、什器破壊作業をやらなければならぬか、その理由の本体ほんたいについては光枝は何にも知らなかつたし、なんにも思い当ることがなかつた。

犠牲ぎせいの  
大花瓶おおかびん

小間使ギンヤの什器破壊作業じゅうきはかいさぎようは、その第二日にいたつて、

俄然<sup>がぜん</sup>猖獗<sup>しょうけつ</sup>を極<sup>きわ</sup>めた。まず起きぬけに、電灯の笠をがちやーんとやったのを手始めに、勝手元ではうがいのコップを割り、それから旦那様の部屋にいつて灰皿を卓<sup>テーブル</sup>子のうえから取り落し（たことにして実は指先でちよいとついたので）、たちまち旦那様をベッドの上から下へ顛<sup>てんらく</sup>落させたのだった。

「わーあ、な、な、なにごとじや」

「どうもすみませんでございます」

「おお、ギンヤか。なに、灰皿を壊した。朝つばら大きな音をたてちや困るね。わしはこの節<sup>せつ</sup>、心臓がすこし弱つとるんで、物を壊してもなるべくしずかにやってくれ」そういつて、旦那様はまたベッドにもぐりこんでしまった。光枝が見ると、旦那様は、壁

の方に向き伏して、その大きな肉塊にくかいが、早いピッチでうごめいているのを認めた。

「あんた、なんか業病ごうびょうがあるんじゃない。だって指先に一向力がはいらぬじゃないの」責任者のお紋もんというのに、光枝はたつぷり皮肉ひにくをいわれた。

「病気なんてありませんけれど、あたし、そそっかしいのですわ。これから気をつけます」

「そそっかしいのも、病気の一つだよ。子供じゃあるまいし、十六七にもなつて——ちよいとお前さん、年齢としはいくつだっけね、わたしや洋装の女の子の年齢がさっぱり分らなくつてね」

「あら、いやですわ。あたし、もっと上ですわ」

「じゃあ十八てえところ？」

「ほほほほ、ほんとはもう一つ上の十九ですけれど」と、光枝は嘘をついた。

「へえー、お前さん、十九かい。まああきれたわね。わたしや十六七とばかり思っていたよ。じゃあもう色気いろけもたつぷりあつて——旦那様もなかなか作戦がしつかりしていらつしやるわね。へえ、そうかい、十九とは……」お紋は、ひとりで感心していた。

「あのう、うちの旦那様の御商売は、なんでいらつしやいますの」「ああら、あんたそれを知らないで来たの」

「ええ」

「ずいぶん呑気のんきな娘ね。知らなきや、いつてきかせるが、うちの

旦那様はやまを持っていらつしやるのよ」

「え、やま？　こうざん 鉱山のことですの」

「そうそうその鉱山よ。金銀銅鉄鉛なまり石炭、なんでも出るんですつて。これは内ないしよ緒だけれどね、うちの旦那様は、お若いときダイナマイトと鶴つるはし嘴とをもつて、日本中の山という山を、あつちへいったりこつちへきたり、真黒になつて働いておいでなすつたんですとき。つまり、鉱夫をなすつていらつしやつたのよ。そんなこと、わたしが話したといつちやいやーよ。わたしやお前さんが好きだからおしえてあげたんだがね」お紋は、ふふふと鼻のうえに皺しわをよせて気味のわるい笑い方をした。

（なりきん 鉱山成金だったのか？） 帆村探偵ときたら、仕事を自分に頼

んでおきながら、これから働かせる家の主人公がなにを商売にしているのかも教えなかつたんだ。お紋がこれだけ喋れば、もういい。帆村探偵なんか、間抜けの標本みたいなもんだと、光枝はひそかに鼻を高くしたことだった。

だが一体、鉱山業のこの家の主人公と、そして帆村が苦心しつつある探偵事件と、どういう事柄によつて繋がつながっているのであらうか。それについて光枝はすこしの手懸りも持ち合わせていなかったが、彼女も女探偵のことであるから、この興味ある事実をそのうちにきつと探し当ててみせるぞと、心の中で宣言したことだった。

こうなれば、早い方がよかろうと思つて、光枝は帆村から頼ま

れた大花瓶を、その日の午後、見事にがちやーんと壊してしまつた。なにしろ旦那様の居間は、床が煉瓦で敷いてあつたから、下におとせば必ず失敗の虞おそれなく完全に壊れてしまうのだつた。もつともその煉瓦のうえには、立派な絨じゆうたん緞じゆうたんが敷いてあつたが、それは小さくて、本棚の下は煉瓦れんがだけがむき出しになつていた。

「あれえ——」光枝は、大花瓶を手から離すときに、もつともらしい声をかけておいた。それから手を離したのであるが、なにしろ大きな花瓶のことであつたから、かなり派手な音がして破片はあたりに飛び散り、その一つが彼女の脚に当つた。とたんにびりびりと灼やきつくような痛味いたみである。

「あつ、怪我をした！」チヨコレート色の絹の靴下は、見るも無む

慙ざんに斜ななめに斬れ、その下からあらわに出た白い脛すねから、すーつと鮮せ血んけつが流れだした。

（あ、困った）そのとき、廁かわやの扉が、はげしく鳴りひびき、中から旦那様が、茹ゆ蛸でだこのような頭をふりたてて出てきた。

「なんじゃ、なんじゃ。やつ、またギンヤか。なにを壊した。えつ、その棚のうえにあった大花瓶か。うーむ、それは……」とたんに旦那様の顔から血がさつと引いた。

「ううむ。——」と、旦那様は急にそわそわして、壊れた花瓶には目もくれず室内をぐるつと見まわした——が、そこで胸こぶしを拳こぶしでとんと叩きながら、

「ああ、おどろいた」と呻うめくようにいった。

そこへ責任者のお紋をはじめ、お手伝いさんの一隊がばらばらと駆けつけた。

「あらまあ、またオギンさんが壊したの。きようはこれで七つ目よ」

光枝は光枝で、傷口をおさえて、その場に坐りこみ、

「あいたたた」と叫ぶ。旦那様は、光枝の負傷にやつと気がついた。

「おう、えらい怪我をやったな。そりや早く手当をせんといかん。ほら、この<sup>たばし</sup>苘をもんで傷口につけろ。このハンカチでおさえて、そして医者を呼べ」

「あらまあ、オギンさん、怪我をしたの。天<sup>てんばつてきめん</sup>罰<sup>ばつ</sup>覲<sup>てきめん</sup>面よ」

「こら、なにをいつとるか。早くハンカチで結ゆわえてやれ、それからこの壊れ物を早く片づけて——」と、旦那様はいったが、どうしたわけか急にまた周章あわてて、

「おい、皆、早く向うへいけ。片づけるのはあとでいいから、早く向うへいけ」

「はい、はい」といいながら、お紋は光枝の怪我けがした脚にハンカチを結びつけようとしているのを見て、旦那様はさらに大きな声で、

「こら、ここで結えなくともいい。ギンヤを早く向うへ担かついでいけ。こら、早くせんか」

旦那様が目に入れても痛くない筈はずのギンヤまで、矢庭やにわに退場を

命ぜられるとは、このとき旦那様の胸に往来するよほどの不安があつたものらしい。その不安とは？

### 中間報告

光枝は、かねて帆村との約束で、大花瓶破壊事件の騒ぎが一通りかたづくとき、その足でハガキを出しに屋敷を出た。彼女がポストに近づいたとき、ポストの向うから、

「やあ、だいぶん涼すずしくなりましたねえ」と声をかけたものがある

る。もちろんそれは帆村莊六だった。光技は、どぎまぎして、

「あら、まあ先生」と叫んだ。

「さあ早いところ伺いましょう。もう大花瓶を壊したんですか」

「あら、早すぎたかしら」

「そんなことはありません。大いに結構です。ところで貴女は探偵だから分るでしょうが、あの大花瓶を壊されてから主人公は、なにか室内の什器じゅうきの配置をかえたということはありますか」

「あーら、先生は都合のいいときばかり、あたくしを探偵扱いなさるのですね。そんな勝手なことってありませんわ」と、やりかえしたが、心の中ではいよいよ事件の核心にふれてきたんだわと光枝はひそかに胸をどきどきさせた。

「そんなことはどうでもいい。あとで皆一つに固め貴女の抗議をうけることにしましょう。——で、いまの返事は、どうなんですか。まさか貴女は、それについてなんにも気がつかないというわけではありますまい」帆船は、日頃の彼にも似合わず、妙に焦りあせ気味になっていた。

「そうですねえ」と光枝はわざと間のびのした返事をして、帆船がじれるのを楽しみながら、「旦那様のお居間の什器じゅうぎで、位置の変わったものといえば——」

「なんです、その位置の変わったものは？」

「木彫きぼりの日光にっこうの陽明門ようめいもんの額がくが、心持ち曲つていただけです」

「ふむ、やっぱりそうか。その外に変わったものがもう一つあるで

しよう」

「いいえ、他にはなんにもありませんわ」

「いや、そんなことはない。きつと有る筈ですよ。それとも貴女の鈍い探偵眼には映らないのかもしれない」

「まあ、——」と光枝は、むかむかとしたが、

「なんとでもおっしゃい。ですけれど、他にはなんにも変つたものはありませんのよ」

「そんな筈はないんだ。そこが一番大切なところなんだが——ちえつ、仕方がない」と帆村は無念そうに唇を噛んで、「とにかく壊れた什器は、至急補充します。それから大花瓶は、ちやんと元のところに置くようにしてくださいね」

「だって大花瓶は、きよう壊してしまったんじやありませんか」  
「だから、至急あとの品を補充するといっているじやありませんか」

「ああ、また新しい花瓶がくるのですか」

「貴女も案外噂ほどじゃないなあ」

光枝は、それが聞えないふりをして、

「そして先生が持つていらつしやるの」

「そんなことは、貴女が心配しなくてもいいです」

「先生、それから……」

「頼んだことだけはやってください。もつと気をつけているんですよ。失敬」帆村は、はなはだ不機嫌で、ろくに光枝の言葉を聞

こうともせず、向うへ行ってしまった。

光枝は、妙にさびしい気持をいだいて、お屋敷へかえった。そのさびしい気持は、やがて一種の劣等感と変った。

（果して自分は、帆村のいったように探偵眼が鈍くて、当然旦那様の居間に起っているはずの什器の位置変化に気がつかないのだろうか）

光枝は、旦那様の居間へはいつていつた。旦那様は、そこにいらつしやらなかつた。どこにいかれたのであろうか。来客らいきやくかもしれない。機会は今だと思つた彼女は、あたりを見まわして、誰もいないことを確たしかめると、つと木彫の日光陽明門の額の前に近よつた。そもそも、この額一枚が、あの大花瓶の破壊以後に位

置の変化をやった唯一の品物なのである。この額に、なにか重大なる意味がひそんでいなのだ。それは一体なんであろうか。

伸びあがって光枝が見ていると、その額はずいぶん大した彫ほり物細工のざいくであつた。額の奥から、一番前に出ている陽明門の廂ひさしまで、奥行おくゆきが二寸あまりもあつて、極めて繊細な彫ほりがなされてあつた。これはよくある一枚彫なのであろうが、このように精巧せいこう緻密ちみつなものにはじめてお目にかかつた。

だが、彫を感心しているばかりでは仕方がない。なにかこの額に関して秘密があるのである。それはなんの秘密であろうか。

「ああ、もしかすると……」そのとき光枝の頭に閃ひらめいたのは、この部厚ぶあつい一枚彫の陽明門が、じつは一枚彫ではなくて、陽明門の

あたりだけが、ぽっくり嵌めこみになっているのではあるまいか。そしてそれを外すと、この額が実は一つの箱になっている。つまり秘密の隠し箱である。

「きつと、そうかもしれないわ」光枝はそれをたしかめるために、つと手を額の方に伸ばした。そのとたんであつた。彼女の背後にえへんと大きな咳払いが聞えた。

(失敗しまつた!) と思つたが、もう遅い。あの咳払いは、旦那様だ。

意外なる収しゅうかく穫

「ギンヤ、そこでなにをしているのじゃ」

「はい。この額がすこし曲って居りますので」

「なに、曲っていたか。はっはっはっ、曲っていてもいい。そのままにしておけ」

「でも、すぐでございますから」

「いや、手をふれることならん。すこしの曲りを直すつもりで、とたんに下に落されて、額がめちやめちやに壊れてしまつては大損じゃからな。わしはもういい加減懲りかげんことるでな」

「どうもすみません」

「なあに、謝まらんでもいい、壊されるのには懲りていながら、

あんたに居てもらおうというのは、そこにソノ……」といっているとき、廊下の向うから、呼ぶ声がしたので、光枝は毒蛇の顎をのがれる心地して、旦那様の前を退った。

それから暫くして、光枝は、菊の花を一杯生けこんだ大花瓶をもつて現れた。そしてそれを本棚の上にそつと置いた。そして電氣をつけた。

旦那様は、安楽椅子に寄懸つて、もう居いねむり睡ねむりをしてござつた。だがそれは狸寝入らしく、ときどき瞼まぶたがびくびくと慄ふるえて、薄眼があく。もちろん旦那様の視線は、光枝の着物のうえから身体をつきさしている。

「旦那様、御入浴をどうぞ」

「いや、きょうはわしは、はいらんぞ」

眠っている筈の旦那様が、はつきり返事をした。あの入浴好きの旦那様が、いつになくはいらないとおっしゃる。

光枝は、ははあと思つた。

（ああそうだったのか。帆村先生が、もう一ヶ所、位置の変つたものがある筈だとおっしゃつたのは、この意味だったか）

——というのは、外でもない。たしかに、或る一つの重要物件が、あの陽明門ようめいもんの額から取出されたのだ。そしてこの居間の、他のいずれかの場所に移されたのだ。帆村はその移された場所を光枝に質問したのだ。ところが光枝は、知らないと答えたので、

帆村が悲観したのであるが、まさかその重要物件が、陽明門の額

から出て、旦那様の懐かいちゆう中に移されたとは、さすがの帆村も気がつかなかったのであろう。しかるに光枝は一步お先に、そのことに気がついた。

まだ帆村探偵の知らない事実を、風間女探偵は知っているのだ。彼女はちよつと得意であつた。

だが、その重要物件というのがなんであるか、光枝には分つていなかった。帆村は大体知っているのであろう。知つていればこそ光枝などをこんなところへ住込ませて、おおげさ大袈裟なそうさじん捜査陣を張っているのだ。

(いいわ、こつちで先生よりもお先へ、その重要物件を失敬してしまおう)。そう決心した光枝は、その夜更よふけて、ほうばい朋輩の寢息

を窺<sup>うかが</sup>い、ひそかに旦那様のベッドに近づこうとした。だがそれは失敗だった。ベッドの置かれてある主人公の居間は、錠がちゃんと下りていて、明<sup>あ</sup>ける術<sup>すべ</sup>がなかった。

その翌朝のこと、光枝は旦那様の居間へは行っていった。旦那様は、起きて蓐<sup>たばこ</sup>を喫<sup>す</sup>っていた。彼女は挨拶をして、朝刊新聞をベッドのところへ持つていった。

旦那様は、きようは不機嫌と見えて、常に似<sup>じ</sup>ず一言<sup>ごん</sup>も冗<sup>じょう</sup>談<sup>だん</sup>さえいわない。そして蒼い顔をして、眼が血走っていた。その間にも光枝は、この室内を一応隅から隅までぐるっと見廻すことを忘れなかった。

(あつ、あそこだわ!) 炯<sup>けい</sup>眼<sup>がん</sup>なる彼女の小さな眼に映<sup>えい</sup>じた一つ

の異変！ それは高い天井の隅にある空気抜きあみごうしの網格子あみごうしが、ほんのちよつと曲つていたことである。それに気がついて、大だい理り石きの洗面器の傍にかかっているタオルを見ると、これが真黒になつてよごれていた。

（たしかにそうだわ。例の重要物件は、旦那様の懐中を出て、あの空気抜きの網格子あみごうしをあげて、天井裏てんじょうらに隠されたのにちがいない！）

光枝の胸は、またどきどきしてきた。じつに大発見である。

光枝は、じつとしていられない気持ちになつて、ハガキを握ると、ポストのところへいつてみた。まさかこの早朝から、そこに帆船が来ているとは思わなかつたけれど、家にじつとしていることに

は耐えられなかったのだ。

「やあ、とうとう突留めつぎとたかね」ポストのかけから、帆村がぬつと顔を出して、いきなりそういったものだから、光枝はびっくりした。

光枝の報告は、帆村を躍りあがって悦よろこばせた。そして二人は、連立つてお屋敷の方へ引返した。その途中、帆村が早口にいった話によると、

「もう隠す必要はないだろうが、あの大将は、じつはもう一人の仲間と協力して探しあてた或る重要資材のこうみやく鋳脈いしじやくのことを、内緒はっこつにしているんだ。その仲間というのは、山の中で縊死いしじやく自殺の形で白骨はっこつになっているのを発見されたが、遺書もなんにもない。

ただその生前<sup>せいぜん</sup>一枚のハガキが、その遺族の許に送られていたが、それによると、あの大将と最近大発見をしたから、やがて大金持になつて、これまでお前たちにかけて苦勞を一ぺんで取返すといふことが書いてあつた。だが、何を発見し、どこで発見したのか、それについては一言<sup>いちごん</sup>も触<sup>ふ</sup>れてなかつた。そこで仕方なく、あの大将の身<sup>しんぺん</sup>辺から秘密を探しだす必要が生じたのだ。何を発見し、それをどこから発見したか。これからいつて、のつぴきならぬ証拠をつきつけて、あの大将の口から聞くんだ。さあ、君はさきへ歸りたまえ。僕は表門から案内を乞うから」と、帆村ははじめて事件の内容を語つたのだつた。

光枝がお屋敷へ戻つてみると、ただならぬ様子である。なにご

とが起つたのか。

「いや、お前さん。たいへんなんだよ。旦那様のお居間で、大きな音がしたんだけれど、皆で入っつていこうとしても、扉に錠がかかつていて明あかかないんだよ。窓にもカーテンが下りていて、中は見えないし、困つちまうね。それに中には旦那様がいらつしやる筈なのが、しーんとしているんだよ。気味がわるいじゃないかねえ」

お紋はぶるぶるふる慄おそえていた。でも、男たちが窓を外から破つて、室内へはいつた。

「おい、たいへんだ。旦那様が絆ことき切れておいでだ」扉を内側から開けて、下男たちがいつた。

旦那様は、たしかに居間の絨緞じゆうたんのうえに大だいの字じにのびて死んでいた。

その傍には、小卓子テーブルや椅子などが倒れており、大きな桐きりの箱なども転がっている。

そのとき室内へ組立て梯子はしごを担かつぎこんできたものがあつたが、それは別人ならぬ帆村だった。彼はするすると身軽にそのうえにのぼって、天井裏の網格子を外して、そこから小袋をとりだした。「うむ、これだ」

小袋の口を明けて逆にしてみると、黄色っぽい鼠がかつた鉱石が転がり出た。

「ふん、これは水鉛鉱すいえんこうだ。珍らしくなかなか良質のものだ。光

枝さん、大手柄だぞ」

さてここに隠されていた鉱石は現れたが、その鉱脈の所在を書いた地図も書類も、ついに見当らなかつたので、光枝はがっかりした。だが帆村は、光枝の耳にそつと口をよせて、

「まだ悲観するのは早い。もう一つ、取つて置きの方ネがあるんだ」

「まあ、それはほんとですの。その方ネは、なあに」

「それはあの新しい大花瓶の中にあるんだ」

「えっ」

「つまりあの大花瓶の中に、君をいつか愕かせた録音の集音器おどろが入っているんだ。昨夜さくやひとばん一晩、あの集音器はこの居間しゅうおんきにいて、

主人公の寝言ねごとを喰べていたんだ。僕はその寝言の録音に期待をもっているんだよ」

「まあ、そんなことをなすつたの」

光枝の愕きはのちに帆村が大花瓶の中に仕掛けた録音線ろくおんせんから、主人公の寝言を摘てきしゅつ出したときに絶頂に達した。例の不正な脈の秘密が知られるかと気がかりの主人公は、ついに寝言ねごとのうちに、いくたびかその鉾山の位置を喋っていたのであった。ここに事件は解決した。

光枝は、この事件で立役者たてやくしやではなかつたけれど、科学探偵帆村の活躍ぶりに刺戟しげきされて、元のように朗ほがらかな気分の女性に返つた。





# 青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 地球要塞」三二書房

1990（平成2）年4月30日第1版第1刷発行

初出：「大洋」

1939（昭和14）年9月号

※底本は表題に「什器破壊業《ものをこわすのがしようばい》事件」とルビを付しています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2007年7月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 什器破壊業事件

## 海野十三

2020年 7月13日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>